漢字に関する Can-do Statements　試案

加納千恵子（筑波大学 人文社会系）
kanochie@intersc.tsukuba.ac.jp

【要約】

本研究は、世界的な言語教育評価の流れの中で、複雑で特異な表記システムを有する日本語において漢字の運用力を言語運用能力全体の中にどのように位置づけるかを検討するための一試案である。外国人学習者が漢字に関してどのように「できる」あるいは「できない」と意識しているかを探るため、Can-do statements形式の調査紙を作成し、117 名の中上級学習者に実施した。この意識調査の結果を検討し、漢字に関する Can-do statements 形式の自己評価の可能性について報告する。

１．はじめに

近年、欧州評議会による CEFR（言語のためのヨーロッパ共通参照枠）[1]、国際交流基金による「JF 日本語教育スタンダード」（以下「JF スタンダード」）[2]などのように、言語教育のための共通参照枠を作る動きが広がっており、その背景には、知識よりも技能や運用力、特に実際のコミュニケーション場面における運用能力を評価しようとする傾向がある。そして、実際の場面で何ができるようになるのかという到達目標を Can-do statements（以下、Cds と略す）によって記述することが求められるようになってきている。

ヨーロッパ系言語のようにアルファベット 26 文字で読み書きができる言語においては、書記言語は音声言語を写すための二次的なものという位置付けが長くされてきており、CEFR のように海外で開発された共通参照枠において、文字の運用力は言語運用力全体の中でそれほど重視されていないように見える。しかしながら、日本語の場合、多くのヨーロッパ系言語とは大きく異なり、ひらがな・カタカナという２種類の表音文字を併用する上に、表語文字（あるいは表形態素文字）である漢字との混用という複雑で特異な表記体系を有しているため、「話す・聞く」能力と「読む・書く」能力とのギャップが大きいという特徴がある。したがって、日本語の言語能力を評価する際には、このような言語の独自性にも配慮する必要があると思われる。しかし、日本で開発された国際交流基金の JF スタンダードにおいてさえも、日本語の文字の運用力に関して適切な位置づけがなされているとは言いがたい。日本語の文字、特に漢字の知識や運用力が「読む・書く」といった技能のみならず、日本語の語彙力や文法力、コミュニケーション活動全体の中でどのように位置づけられるべきなのかを検討することが大きな課題となっていると思われる。

そこで、そのための第一歩として、漢字に関する知識や運用力について学習者自身がどのように「できる」あるいは「できない」と意識しているのかを探るという目的で、Cds 形式の調査紙を作成し、中

---

[1] Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment.* を参照。

[2] 国際交流基金（2010）『ＪＦ日本語教育スタンダード 2010』を参照。

上級の外国人学習者を対象に実施した。本稿では、この意識調査の結果と、外国人学習者の漢字運用力を測るために考案された漢字 SPOT 力テスト[3]の結果を比較検討し、報告する。そして、このような漢字に関する Cds 形式の自己評価のあり方について考える。

２．漢字に関する Can-do Statements　を考える

漢字に関する Can-do statements という場合、「実際のコミュニケーション場面で漢字を使って何ができるのか」を考えるのが普通であろう。村上ほか（2013）によれば、Cds というのは、「学習者が遭遇するさまざまな状況・場面を提示し、そこで所定の行動が「できる」か「できない」かを判断してもらうことによって評価するもの（p.223)」である。国際交流基金が開設しているウェブサイト「みんなの Can-do サイト」[4]には、A1 レベルの「読み（受容)」の活動について以下のような Cds がある。

例1）A1 レベル　必要な情報を探し出す　郵便物やメールなどの宛名を見て、自分宛かどうかを確認することができる

例2）A1 レベル　情報や要点を読み取る　店やレストランの外に貼ってある休業のお知らせなどを見て、休みであることやその期間など、ごく基本的な情報を理解することができる

例 3）A1 レベル　手紙やメールを読む　旅先からの家族や友人の短い簡単な文で書かれた葉書やメールなどを読んで、どこへ行ったか、何をしたかを理解することができる

しかしながら、上記のような Cds は、学習者が日本にいるのか、海外にいるのか、どこの国・地域にいるのかによって解釈が異なると考えられる。日本であれば、例 1)は、住所に使われる県や市町村の漢字が判別できる、自分の名前のカタカナが確認できるなどの能力を表していると解釈できるだろうが、海外にいる学習者にとっては、住所や宛名がその国の文字で書かれていることも多いため、必ずしも漢字や仮名の知識を必要としないと考えられる。例 2)の店やレストランの表示も同様である。海外にある日本料理店を考えると、日本語による表示以外に現地の言葉でも書かれていることが多いため、必ずしも明確な能力記述となっていない可能性がある。また、例 3)のような手紙やメールは、誰がどこから出したものか、簡単なメッセージの内容が異なれば、必要となる文型や語彙、そして文字も異なることが予想される。このように、実際のコミュニケーション場面における Cds となると、設定される場面によって、また活動の内容によって、必要とされる語彙や文字などにはかなりのバリエーションが出て来るはずである。

したがって、ある言語の活動に必要な Cds を完成させるためには、学習者の置かれている環境によって、実際に必要となるコミュニケーション場面、その言語活動の内容を吟味した上で、それに応じて必要な文型、語彙、文字などを抽出するというボトムアップの作業が必要であろう。一方、海外にいる学習者にとって、初級レベルではそれほど多くの仮名や漢字を知らなくても先述のような活動ができるとしても、だからと言って、そのレベルで漢字を教える必要がないということにはならないで

---

[3] 今回の調査で使用したウェブ版の漢字 SPOT テストは、筑波大学留学生センターの日本語・日本事情遠隔教育拠点が運営するサイトにある TTBJ(筑波日本語テスト集、 http://ttbj.jpn.org)にアクセスして受験できる。詳細は、加納（2009)、加納(2010)、村上・加納・衣川・小林・酒井（2013）を参照。

[4] 「みんなの Can-do サイト」は、国際交流基金が運営する公式サイト「JF 日本語教育スタンダード」（http://jfstandard.jp/）から入ることができる。

あろう。それは、中上級レベルとなって、日本語で書かれた新聞、雑誌や小説を読んだり日本語で文章を書いたりする段階になるまでには、相当数の文字（漢字）や語彙などの言語知識を身につける必要があることが明らかだからである。中上級レベルに到達するまでに必要な漢字や語彙をどの段階でどのように学習させるべきか、その手前の各段階において、何ができるようになっていなければならないのか、というようなトップダウンの指針および学習設計を示す必要もあると思われる。

本研究では、中上級段階における読み書きにおいて必要となる漢字・漢字語彙の知識・運用力を想定し、それを効率的に達成するための漢字・漢字語彙配当を検討するための準備作業として、漢字に関する能力記述文（Cds）の策定を試みる。具体的には、日本語学習の途上で中級後半段階にいる外国人学習者が、漢字および漢字語彙に関してどのようなことが「できている」と意識し、どのようなことは「できていない」と意識しているのかを探るという目的で、漢字に関する知識および運用力を Cds の形式で記述することを試みた。

加納（1996）によれば、漢字の持つ「形（字形）」「音（読み）」「義（意味）」「用法」という４つの情報に関して、入門期の非漢字圏学習者は、漢字の字形の識別にも困難を覚えるが、学習が進むにつれて字形は難なく識別できるようになり、漢字を見て意味を理解するところまでも比較的早く達成されることが分かっている。しかし、中上級になっても、読みと意味を知っている言葉を漢字で書くこと、つまり字形の再生には依然として問題を抱えている。それに対して漢字圏の学習者は、母語における漢字知識の恩恵を受けて、知っている言葉を漢字で書くことには困難を感じないが、逆に、母語からの干渉によって読みを不正確に覚えていたり、日中の意味用法のずれに気づかずに使ってしまったりする傾向があるという結果が出ている。

そこで、以下のように漢字の持つ４つの情報に関して、「漢字に関して何がわかる／できるか」を学習者に自己評価させるための Cds 形式の調査紙を作成した。

(1) 漢字・漢字語の意味がわかる
(2) 漢字・漢字語が読める
(3) 漢字・漢字語が書ける
(4) 漢字・漢字語の用法がわかる

さらに(5)として、漢字の構成要素である「意符（部首）」や「音符」がわかるという項目も加えた。これは、特に非漢字圏学習者に対する漢字教育において、このような漢字の構成要素の利用が効果的であるとして取り上げられることが多いからである。

２－１．漢字・漢字語の意味理解に関する Cds

中級後半レベルの学習者を想定し、漢字・漢字語の意味理解に関して、初級で達成されると思われる 10 項目（M1～M10）と中上級で達成されると思われる８項目（M11～M18）、計 18 項目を用意した[5]。初級で達成されると思われる 10 項目を以下に示す。ただし、10. は 2-6. の漢字の構成要素に関する Cds とも考えられる。

1.「山」「川」「木」などの漢字をみて、その**意味**がわかる　(M1)
2.「月」「火」「水」などの曜日の漢字をみて、その**意味**がわかる　(M2)

[5] 調査紙では、ここに示した通し番号の順に提示された。他の Cds と合わせ、易しいと思われるものから順に並べたため、M1～M10 は通し番号と一致しているが、他の項目では番号が異なっている。

3. 「五十円」「三百円」など、漢字の数字で書かれたねだんの**意味**がわかる(M3)
4. えきの「北口」「東口」「西口」「南口」などの**意味**がわかる (M4)
5. 「目」「口」「手」「足」など、体の部分の漢字の**意味**がわかる (M5)
6. 「魚」「鳥」「馬」「牛」など、どうぶつの漢字の**意味**がわかる (M6)
7. 「父」「母」「兄」「弟」など、家族をあらわす漢字の**意味**がわかる (M7)
8. 「上」「下」「中」「前」など、位置をあらわす漢字の**意味**がわかる (M8)
9. 「女」と「子」で「好き」、「日」と「月」で「明るい」など組み合わせで できた漢字の**意味**がわかる (M9)
10. 「言」「糸」「攵」「雨」など、漢字の部首の**意味**がわかる (M10)

２−２．漢字の読みに関する Cds

初級で達成されると思われる 10 項目(R1〜R10)と中上級で達成されると思われる８項目(R11〜R18)、計 18 項目を用意した。初級で達成されると思われる 10 項目を以下に示す。

12. 漢字の**読み方**はひとつだけではないこと（**音読み**と**訓読み**）がわかる (R1)
14. 「大きい」「小さい」「長い」「古い」など、易しい形容詞の漢字が**読める**(R2)
15. 「行く」「来る」「食べる」「話す」など、やさしい動詞の漢字が**読める** (R3)
16. 「朝」「晩」「毎日」「今週」など、時をあらわす漢字が**読める** (R4)
17. 「元気」「不便」「有名」など、やさしいナ形容詞の漢字が**読める** (R5)
18. 「父」「母」「兄」「弟」など、家族をあらわす漢字が**読める** (R6)
19. 「上」「下」「中」「前」など、位置をあらわす漢字が**読める** (R7)
20. 「図書館」「駅」「病院」など、場所をあらわす漢字が**読める** (R8)
21. 「練習する」「質問する」「研究する」などの漢語動詞が**読める** (R9)
22. 「文学」「歴史」「政治」「経済」など、科目の漢字が**読める** (R10)

２−３．漢字の書きに関する Cds とその他の Cds

漢字の書きについても、上記の意味、読みに相当する数の Cds 項目を揃えることが可能であったが、非漢字圏学習者にとっては、中級段階になっても「書き」が難しい項目であることが分かっているため、書きに関する Cds は６項目（W1〜W6）のみに絞った。50 を越える数の Cds に回答を求めるのは、被調査者の負担が大きくなりすぎることと、「できない」と回答する項目数が増えることが非漢字圏学習者に無力感を与えかねないことによる。調査紙には、書きに関する Cds(W1,W2)とその他の Cds(M11,12、R11,12）に違いがあるかを比べられるような形で 6 項目が並べられている。また、読みに関する Cds（R13〜R16）と書きに関する Cds（W3〜W5）を比べる７項目も以下に挙げる。

26. 日常生活でよくみる漢字語の**意味**がわかる (M11)
27. 日常生活でよくみる漢字語の**読み**方がわかる (R11)
28. 日常生活でよくみる漢字語を自分で**書ける** (W1)
29. 自分の専門分野でよくみる漢字語の**意味**がわかる (M12)
30. 自分の専門分野でよくみる漢字語の**読み**方がわかる (R12)
31. 自分の専門分野でよくみる漢字語を自分で**書ける** (W2)
34. 音読みの漢字語なら、だいたい**読める** (R13)

3.「五十円」「三百円」など、漢字の数字で書かれたねだんの**意味**がわかる(M3)
4. えきの「北口」「東口」「西口」「南口」などの**意味**がわかる (M4)
5.「目」「口」「手」「足」など、体の部分の漢字の**意味**がわかる (M5)
6.「魚」「鳥」「馬」「牛」など、どうぶつの漢字の**意味**がわかる (M6)
7.「父」「母」「兄」「弟」など、家族をあらわす漢字の**意味**がわかる (M7)
8.「上」「下」「中」「前」など、位置をあらわす漢字の**意味**がわかる (M8)
9.「女」と「子」で「好き」、「日」と「月」で「明るい」など組み合わせで
できた漢字の**意味**がわかる (M9)
10.「言」「糸」「攵」「雨」など、漢字の部首の**意味**がわかる (M10)

２−２．漢字の読みに関する Cds

初級で達成されると思われる 10 項目(R1ーR10)と中上級で達成されると思われる８項目(R11ーR18)、計 18 項目を用意した。初級で達成されると思われる 10 項目を以下に示す。

12. 漢字の**読み方**はひとつだけではないこと（**音読み**と**訓読み**）がわかる (R1)
14.「大きい」「小さい」「長い」「古い」など、易しい形容詞の漢字が**読める**(R2)
15.「行く」「来る」「食べる」「話す」など、やさしい動詞の漢字が**読める** (R3)
16.「朝」「晩」「毎日」「今週」など、時をあらわす漢字が**読める** (R4)
17.「元気」「不便」「有名」など、やさしいナ形容詞の漢字が**読める** (R5)
18.「父」「母」「兄」「弟」など、家族をあらわす漢字が**読める** (R6)
19.「上」「下」「中」「前」など、位置をあらわす漢字が**読める** (R7)
20.「図書館」「駅」「病院」など、場所をあらわす漢字が**読める** (R8)
21.「練習する」「質問する」「研究する」などの漢語動詞が**読める** (R9)
22.「文学」「歴史」「政治」「経済」など、科目の漢字が**読める** (R10)

２−３．漢字の書きに関する Cds とその他の Cds

漢字の書きについても、上記の意味、読みに相当する数の Cds 項目を揃えることが可能であったが、非漢字圏学習者にとっては、中級段階になっても「書き」が難しい項目であることが分かっているため、書きに関する Cds は６項目（W1ーW6）のみに絞った。50 を越える数の Cds に回答を求めるのは、調査協力者の負担が大きくなりすぎることと、「できない」と回答する項目数が増えることが非漢字圏学習者に無力感を与えかねないことによる。調査紙には、書きに関する Cds（W1,W2）とその他の Cds（M11,12、R11,12）に違いがあるかを比べられるような形で 6 項目が並べられている。また、読みに関する Cds（R13ーR16）と書きに関する Cds（W3ーW5）を比べる７項目も以下に挙げる。

26. 日常生活でよくみる漢字語の**意味**がわかる (M11)
27. 日常生活でよくみる漢字語の**読み**方がわかる (R11)
28. 日常生活でよくみる漢字語を自分で**書ける** (W1)
29. 自分の専門分野でよくみる漢字語の**意味**がわかる (M12)
30. 自分の専門分野でよくみる漢字語の**読み**方がわかる (R12)
31. 自分の専門分野でよくみる漢字語を自分で**書ける** (W2)
34. 音読みの漢字語なら、だいたい**読める** (R13)

35. 訓読みのことばなら、だいたい**読める** (R14)
36. 特別な読み方のことばでも、だいたい**読める** (R15)
37. 知っていることばなら、漢字で正しく**書ける** (W3)
38. ワープロを使えば、正しい漢字が選べる（**書ける**）(W4)
39.「糸へん」「雨かんむり」「門がまえ」など、よく使われる漢字の部首が**書ける**(W5)
40. 知らない漢字でも、音符がふくまれている漢字なら**読み方**が推測できる (R16)

２−４．中上級の漢字語に関する Cds

中上級レベルで達成されると思われる漢字の意味理解に関する Cds(M13ー18)、読みに関する Cds (R17,18)、書きに関する Cds (W6)の計９項目を以下に示す。M15ーM18 は、用法に入る可能性もある。

41. ３字漢語、５字漢語などの長い漢字語を見て、**意味**の構成がわかる (M13)
43.「勝つ」の反**義**語、「収入」の反**義**語、「拡大する」の反**義**語などがわかる (M14)
44.「愛読する」「暴落する」「常用する」などの漢語動詞の**意味用法**がわかる (M15)
45.「危険」「健康」「豊富」「深刻」などの漢語形容詞の**意味用法**がわかる (M16)
46.「怒り」と「怒る」,「著しい」と「著す」,「頼む」と「頼る」など異なる**訓読み**がわかる(R17)
47.「精神」と「精進」,「希望」と「所望」,「重役」と「使役」など異なる**音読み**がわかる(R18)
48.「務める」と「努める」と「勤める」など同じ読みの語の**意味用法**の違いがわかる (M17)
49.「習慣」と「慣習」と「慣例」と「風習」など、類義語の**意味用法**の違いがわかる (M18)
50.「こうがい」「ほけん」「きげん」などの同音語を漢字で**書く**ことができる (W6)

２−５．漢字の用法に関する Cds

漢字・漢字語の意味と用法は、中上級レベルになると切り離せないことも多いが、ここでは「用法」に限定した６項目（U1ーU6）を挙げる。

23.「運転手」の「手」、「音楽家」の「家」、「会社員」の「員」などの接尾辞の**用法**がわかる(U1)
24.「無意味」の「無」、「不自由」の「不」、「非公式」の「非」など接頭辞の**用法**がわかる (U2)
25.「増える」と「増加する」、「減る」と「減少する」、「移る」と「移動する」など、
和語動詞と漢語動詞の**用法**のちがいがわかる (U3)
32. 漢字のことばを見ると、名詞か、動詞か、形容詞かなど、その**品詞**がわかる (U4)
33. 漢字のことばを文中で正しく**使う**ことができる (U5)
42.「再」「超」「総」「値」「帯」「率」など、接頭辞や接尾辞になる漢字の**用法**がわかる (U6)

２−６．漢字の構成要素に関する Cds

漢字の部首（意符）や形声文字の音符といった構成要素は、特に非漢字圏学習者に漢字を効率的に教える際に有効だと言われているが、このような構成要素についての学習者の「できる」意識をみるために、５項目を用意した。ただし、以下のように C1 は意味、C4 は書き、C5 は読みの Cds と重なっているため、構成要素だけに関わっている項目は、C2 と C3 の２項目のみである。

10.「言」「糸」「攵」「雨」など、漢字の部首の意味がわかる (C1/M10)
11.「へん」「つくり」「かんむり」「あし」「にょう」など、漢字の部首がわかる (C2)
13.「青」「可」「義」など、漢字の音読みをあらわす音符がわかる (C3)

39.「糸へん」「雨かんむり」「門がまえ」など、よく使われる漢字の部首が書ける　(C4/W5)

40. 知らない漢字でも、音符がふくまれている漢字なら、読み方が推測できる　(C5/R16)

３．漢字 SPOT テストと漢字に関する Cds 調査の結果

本節では、2013 年２月～３月に実施した漢字 SPOT テストおよび漢字に関する Cds 調査について報告する。調査協力者は 120 名であったが、漢字テストの結果により、明らかに初級と思われる協力者３名を対象から外し、調査対象は 117 名の中上級者のみとした。

調査時期：2013 年２月～３月
調査場所：筑波大学留学生センターなど
調査対象：117 名　非漢字圏　34 名（うち韓国 10 名）
　　漢字圏　83 名
調査方法：1. 漢字 SPOT テスト（中上級）
　　2. 漢字に関する Cds 調査紙

３－１．漢字 SPOT テストの結果

漢字 SPOT テストは、自然な速度の音声を聞きながら与えられた文中の漢字語彙の部分に空欄を設け、漢字を１字選択して入れさせる形式のテストである。小林ほかにより開発された SPOT[6]のテスト形式を利用して漢字語彙の運用力を測るテストとして開発された（加納 2009)。以下にサンプル問題を示す。

例１.♪ コノ ヘヤハ ズイブン シズカ デスネ ♪
　この部屋はずいぶん［　　］かですね。
　　a. 精　　b. 静　　c. 清　　d. 晴
例２.♪アシタノ バンハ キョウトノ ホテルニ トマル ヨテイダ ♪
　あしたの晩は京都のホテルに［　　］まる予定だ。
　　a. 泊　　b. 止　　c. 停　　d. 留

開発当初は文中の空欄に漢字を１字記入するという記述式のテストだったが、WEB 化するにあたって、４肢選択の形式に改められた。例１では、「しずか」という音声を聞き取って、それに相当する漢字の字形を想起し、同一の構成要素「青」を持つ類似形の選択肢４つの中から正答を選ばせる。例２は、「とまる」という同訓の動詞の漢字を選ばせる問題となっている。現在は、初級と中上級の問題を組み合わせて作成された漢字 SPOT（50 問）のセットが公開されている。

117 名の調査協力者の漢字 SPOT のテストの結果を表１に示す。漢字 SPOT の正答率の平均は、非漢字圏が 78%、漢字圏が 87%であった。図１をみると分かるように、非漢字圏学習者は、正答率 84%～80%の学習者が最も多いが、95%～100%の者から 69%以下の者まで、かなり広く散らばっている。それに対

[6] SPOT(Simple Performance-Oriented Test)は、筑波大学の小林典子らによって開発された、日本語の文法運用力を測るための聴解テストであり、自然な速度の音声を聞きながら与えられた文中の空欄をにひらがなを１字入れさせる形式のテストである。詳細は、村上ほか（2013）を参照のこと。

して漢字圏学習者は、90%以上の者が圧倒的に多かったことがわかる。

表１　漢字 SPOT テストの正答率による調査協力者（117 名）の分布

	100% ～ 95%	94% ～ 90%	89% ～ 85%	84% ～ 80%	79% ～ 75%	74% ～ 70%	69%以下
非漢字圏（34）	5名	3名	4名	9名	6名	2名	5名
漢字圏　（83）	22 名	26 名	12 名	12 名	2名	5名	4名
全体の平均（117）	27 名	29 名	16 名	21 名	8名	7名	9名

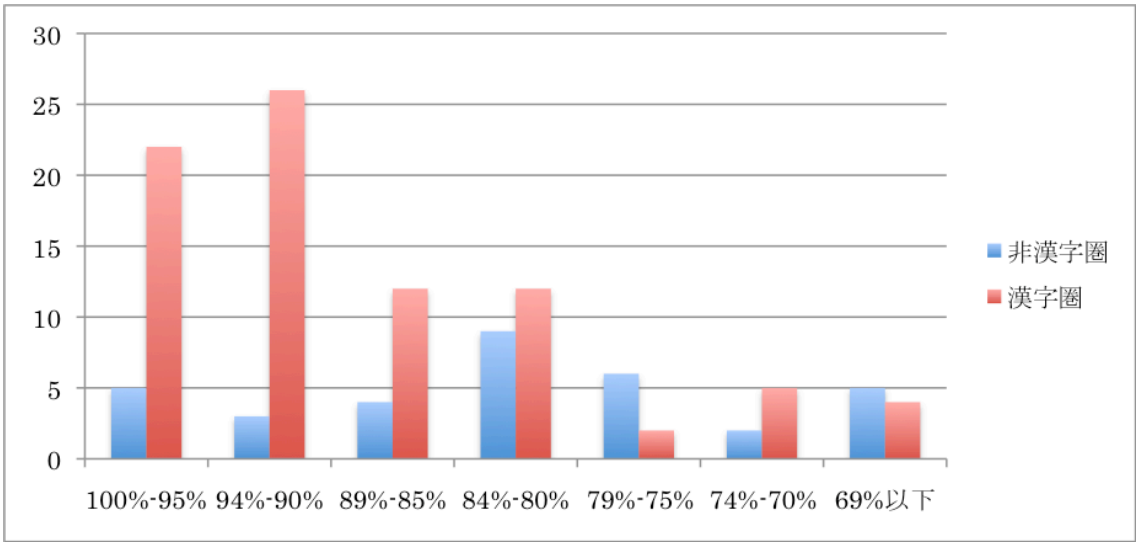

図１　117 名の調査協力者の漢字 SPOT テストの結果分布

３−２．漢字に関する Cds 調査の結果

Cds 調査紙には、意味に関する Cds が 18 項目、読みに関する Cds が 18 項目、書きに関する Cds が 6 項目、用法に関する Cds が 6 項目、構成要素に関する Cds が 2 項目、計 50 項目あり、それぞれの項目について、「４．強くそう思う」「３．そう思う」「２．そう思わない」「１．全然そう思わない」「０．わからない」という５段階評定をさせる形式になっている。

Cds 調査における項目別の評定の平均をまとめたのが表２である。非漢字圏学習者も漢字圏学習者も、意味理解に関しては「できる」と高く評価していることがわかる。しかし、非漢字圏学習者は、漢字 SPOT テストではかなり漢字運用力が高いと評価されているにもかかわらず、「書き」に関しては自己評価が低くなっている。一方、漢字圏学習者の方は、得意なはずの書きに関する自己評価が伸びておらず、全体的に各項目の評定が低く、項目間の差が少ないことがわかる。また、漢字の構成要素に関しては、非漢字圏、漢字圏とも「できる」意識が低いことが指摘できる。

表２．漢字に関する Cds 調査の項目別結果

	意味の Cds	読みの Cds	用法の Cds	書きの Cds	構成要素の Cds
非漢字圏(34)	3.8	3.5	3.4	2.7	2.9
漢字圏(83)	3.6	3.4	3.2	3.2	2.9
全体平均（117）	3,7	3.4	3.3	3.0	2.9

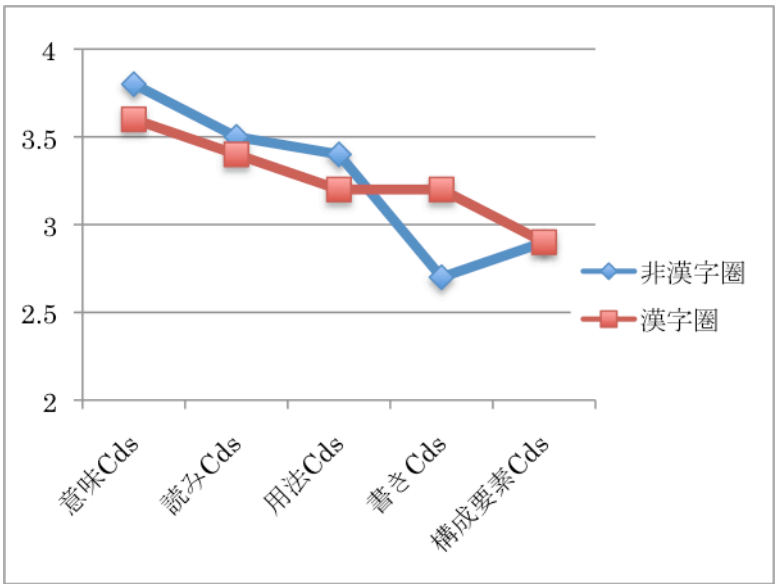

図２　117 名の調査協力者の Cds 調査の項目別結果グラフ

Cds 調査の項目別の結果を折れ線グラフにしたものが図２である。非漢字圏学習者は、意味、読み、用法に関する自己評価と比べて、書きに関する評価が著しく低いことが明らかである。一方、漢字圏学習者の方は「自己評価」というものに対して不慣れなためか，漢字 SPOT テストの結果では、非漢字圏学習者よりかなり成績が良かったにもかかわらず、各項目の評定値の平均は非漢字圏より低くなっており、自分の漢字力を正しく評価できていないことが推測される。

４．まとめと今後の課題

今回の調査結果からわかったことをまとめると、以下のようになる。

（１）　漢字圏学習者だけでなく、非漢字圏学習者も漢字を見て意味がわかるという意識はかなり高い。

（２）　漢字の構成要素に関する「できる」意識は、漢字圏、非漢字圏を問わずあまり高くない。

（３）　漢字の運用力があると思われる中上級者であっても、非漢字圏の場合、「書けない」という意識が強い。

（４） 漢字圏学習者は運用力に関わらず、「できる」意識があまり高くない。あるいは自己評価というものに慣れておらず、正しく評価ができていない可能性もある。

上記の（１）と（３）は、加納・酒井(2003)および加納(2008)でも指摘されたことであり、それらを裏付ける結果となっている。一方、（２）の結果については、中級段階の漢字クラスにおいて漢字の構成要素の利用が重要な学習項目となっているにもかかわらず、その成果が上がっていないということを意味するのか、さらなる検討を要するだろう。

また、漢字圏学習者の中にも非漢字圏学習者の中にも、当然のことながら、自分の能力を過大評価する傾向にある者と、過小評価する傾向にある者とが見られた。しかし全体的には、漢字圏学習者の中に自分の能力を客観的に評価できていないと思われる者が多く見られた。したがって、このような能力記述文による自己評価をプレースメントなどに使うためには、特に漢字圏学習者に対して、自己評価についての適切なトレーニングを行う必要があると思われる。

本稿では、漢字の形、読み、意味および用法という４つの情報に、構成要素に関する知識を加えて、Cds 形式による漢字に関する能力記述を試み、中上級レベルの外国人学習者の自己評価意識を調査した。しかし、今回の調査協力者の人数は、かなり漢字圏学習者に偏っていたことから、今後、非漢字圏と韓国の学習者の数を増やし、検討を続ける必要があると思われる。また、中上級レベルだけでなく、初級や中級レベルの学習者についても調査する必要があろう。

さらに、Cds 項目の妥当性を検討するとともに、Cds による自己評価のトレーニング方法を考える必要もあろう。そのためには、学習者たちが実際に何をどう考えて評定を行っているのか、量的調査だけでなく質的調査の必要もあると考えられる。

※本研究は、2013 年度科学研究費補助金基盤研究(B)「日本語教育スタンダードにおける漢字力の評価に関する研究」（研究課題番号：23320102）からの助成を受けている。

参考文献

加納千恵子（1996）「非漢字圏学習者の漢字力と習得過程」『日本語教育論文集　-小出詞子先生退職記念-』凡人社、pp.257-268.

加納千恵子・酒井たか子（2003）「漢字処理能力測定テストの開発」、『筑波大学留学生センター日本語教育論集』18 号，59-80.

加納千恵子（2008）「レベル別漢字語彙処理能力テストの問題形式　―WEB 漢字テストのマルチレベル化に向けて―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』23 号、1-13.

加納千恵子(2010)「漢字力の評価法　―知識と運用力の評価―」濱川祐紀代(編)『日本語教師のための実践・漢字指導』コラム３，くろしお出版，pp.180-183.

国際交流基金（2010）『ＪＦ日本語教育スタンダード2010』

村上京子・加納千恵子・衣川隆生・小林典子・酒井たか子（2013）関正昭・平高史也(編)『日本語教育叢書つくる　テストを作る』スリーエーネットワーク.

Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cabridge University Press.